連載シリーズ

わんにゃブルな健康最前線

わんちゃん、ねこちゃんの健康について、獣医さんから専門的にお話しいただきます!

「おなかが急にふくれてきたけど?これって大丈夫?」

京都中央動物病院
院長　獣医師
村田（むらた）　裕史（ひろし）先生

9月20～26日は動物愛護週間です。各地で様々なイベントなどが開催されることと思います。可愛いわんちゃんが嬉しそうにしていると愛情表現としてたくさんご飯をあげたり、いつもより長くお散歩したくなりますね。このわんちゃんが大好きなご飯とお散歩にリスクが隠れていることを知っていましたか?

今回はこの危険性について書きたいと思います。

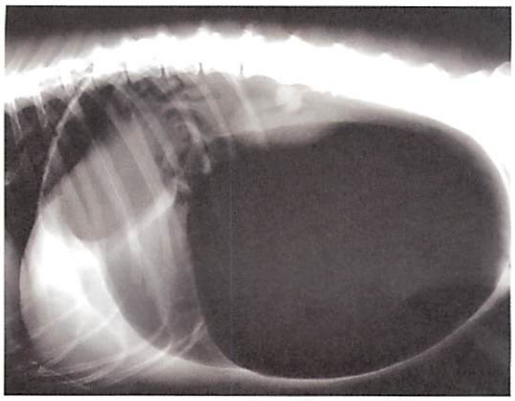
ある晩にご飯をわんちゃんに食べさせて、その後に一緒にお散歩に出かけます。わんちゃんは元気いっぱいに走り回ります。家について気がつくとおなかが膨れてきて苦しそうです。

このような状況のときに様子をみて良いのでしょうか? もちろん、このような設問に対して、様子をみることが正しいこととは思わないでしょう。しかし、これがどんな病気の可能性があり、その病気の緊急性を正しく理解している方は少ないかもしれません。この状況で疑う病気は胃拡張胃捻転症候群（Gastric Dilatation-Volvulus…GDV）です。

このGDVは急激に胃が拡張し、なおかつ捻転を呈し、循環減少性ショックなどからわんちゃんが死亡するリスクが高い危険な病気です。大型犬で、なおかつ胸の深い犬種に多く生じます。最近は大型犬が少なくなっているためこの病気自体も減少傾向ですが、小型犬でも発生する可能性はあるため油断は禁物です。小型犬でこの病気が好発するのはMダックスです。

診断には腹部X線検査が非常に有効です。X線画像（左写真）でこのようにねじれて拡張した胃が確認できると診断としては確定です。

GDVは本当の緊急疾患なので診断と並行して積極的な治療介入が必要。治療としては、内科治療と外科治療の2つが必要です。内科治療の重要な役割は状態を安定化させることです。拡張して捻転した胃によってショック状態を呈するので、



X線画像

①胃を減圧する。
②輸液や各種の薬剤により循環状態の確保や鎮痛などをする。

この2点が重要な内科治療になります。しかし、内科治療だけではこのGDVのコントロールは達成できません。内科治療だけでは胃捻転を完全に整復することが困難です。また、いくら安定し治っているように見えても内科治療だけでは80％以上の確率で再発します。再発を防止するためにも、また、胃の捻転により脾臓や胃壁にダメージが生じることがあるため外科治療が必要となります。

さて、この怖いGDVは予防が可能なのでしょうか。100％防ぐことはできませんが、実は簡単な注意で発生率を下げることが可能です。まず、一回の食事量を少なくします。具体的には一日一回の食事でなく、2回とか3回にすることです。ドライフードを大量に食べて水をたくさん飲むなども胃が拡張する可能性があり、危険です。また、食事後に激しい運動をすることもリスクが上昇するとされております。食事により胃が拡張して、運動で捻転する可能性があるためです。従って、散歩の後に食事を与えるようにすることが大切と言えます。

このように非常に怖いGDVですが、早期に診断し、手術を含めて積極的に治療することにより、生存する可能性が高くなります。逆に診断が遅れ、ショック状態であると多臓器不全やDIC、胃破裂などから死亡するリスクが非常に高い病気です。わんちゃんに最初に書いているような症状があれば、様子をみることなくすぐに動物病院に連絡し、連れて行ってあげてください。

〈お問い合わせ〉
京都中央動物病院
電話・FAX 075-821-1020
京都市下京区柿本町582-3
9:00～20:00

わんにゃ365がオープン!
今日も、明日もワンダフル。
365日毎日使える飼い主さまのためのお役立ち情報サイト
いつまでも健やかで幸せなペットライフを送るために5つのカテゴリーでお役立ち情報をお届けします!

http://wannya365.jp わんにゃブル 検索 QRコードでアクセス!→